

社会課題を解決するための コミュニケーション能力の開発

Developing Communicative Competencies for Social Problem Solving

研究代表者 山崎吾郎 (COデザインセンター 教授)

研究協力者

[学内] 伊藤 武志 (SSI教授) 今井貴代子 (SSI特任助教) 八木絵香 (COデザインセンター 教授) 上須道徳 (経済学研究科 教授)

工藤充 (公立はこだて未来大学 准教授) 大谷洋介 (COデザインセンター 准教授) 小川歩人 (国際共創大学院学位プログラム推進機構 特任講師)

洲上ゆかり (工学研究科附属フューチャーイノベーションセンター 助教) 石塚裕子 (人間科学研究科附属未来共創センター 講師) 田川千尋 (全学教育推進機構 准教授)

[学外] 永田宏和 (デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長) 菅野拓 (大阪公立大学大学院文学研究科 准教授)

辻田俊哉 (関西外国語大学英語国際学部 准教授) 戸谷洋志 (関西外国語大学英語国際学部 准教授)

1. プロジェクト概要

このプロジェクトでは、社会課題を解決に導くために必要となるコミュニケーション能力の開発を目的として、PBL形式のプロジェクトを活用した実践的な教育手法の開発、および人材育成を行っています。PBLとよばれる手法には、主としてプロジェクト型 (PjBL: project based learning) と課題型 (PBL: problem based learning) があります。本プロジェクトでは、取り組む課題の複雑さや規模に応じて段階的なカリキュラムを準備することで、基礎から応用、実践まで、レベル別に教育実践の場を創出することを目指しています。さらに、発展的な学際共創プロジェクト (transdisciplinary research project) へとつなげていくことで、教育・研究・実践のあり方に有機的な連環を作り出していきたいと考えています。

カリキュラムの設計とPBL/PjBLの実施を基本的な活動とし、定期的に行う研究会でその成果や課題を検討し、今後の活動をさらに充実したものにするというサイクルでプロジェクトを進めています。新型コロナウイルス感染症の影響は依然として続いています。今年度に入り、対面での授業が徐々に戻り始め、国内外でのフィールドワークも段階的に再開することができました。加えて、ハイブリッド形式での研究会や打ち合わせや、オンラインを活用した

インタビュー調査を引き続き有効に活用するなど、新たな活動形態も板につきはじめています。

2. 2022年の取組と成果

4年目となる2022年度は、当初の計画を前倒しするかたちで、プロジェクトの成果物を公刊する準備に力を入れました。本プロジェクトを通じて明らかになってきた新たな知見と、事例の積み重ね、そしてプロジェクトを実施するうえで必要になる作法を手に取りやすい文章にまとめ、学内外の関係者に活用してもらうことが目的です。

社会課題の多くは、完全な答えが求められるものではなく、時代や状況、関わり方や関心のもち方によって、さまざまな姿をみせます。そうした正解のない複合的



平取町立二風谷アイヌ博物館にて (北海道スタディツアー)

PBLを活用し 教育・研究・実践に有機的連関を作り出す

な問題を、本プロジェクトでは「やっかいな問題」という概念でとらえています。すなわち、やっかいな問題とは、1. 正解が存在しない、2. 問題に終わりが無い、3. 真偽ではなく善悪が問われる、4. 解決策の有効性を検証する決定的な手段がない、5. 解決策は一回しか実行できず、試行錯誤から学べない、6. 計画の範囲や手順をすべて書き出しておくことができない、7. 問題は二つとして同じものがない、8. 目の前の問題は、別の問題の徴候かもしれない、9. 問題をどう説明するかによって、解決の仕方が変わる、10. 間違っ解決策は人びとの生活に困難をもたらす、といった10の特徴を有した問題のことです。

同書では、やっかいな問題に取り組むための新たな探究様式に欠かせない要素として、「参加」「調整」「創出」「継続」という四つの側面があることを示し、具体的な活動の紹介を行っています。同じような活動に関わる大学関係者のみならず、自治体や企業等において同様の課題をかかえている多くの方に手に取ってもらえる書籍になったと思います。

3. プロジェクトの今後

本プロジェクトの最終年度となる2023年度は、大きく二つの活動を予定しています。

一つ目は、刊行したテキストを活用して、本プロジェクトの取り組みを広く学内外に展開していくための足掛かりとなる活動を行うことです。学内では、新たな授業科目やカリキュラムの設計に活かしていく予定であり、これまでの活動で培った経験を活かした新たな教育プログラムの構想をはじめています。また、学外では、出版物や活動を媒介として学外とのつながりをさらに作り出し、社会課題に取り組むための人・組織・情報が交流できるような場づくりをさらに進めていきます。

二つ目は、こうした取り組みをどのような観点から評価すべきであるか、プロジェクトのインパクトを考えるための適切な指標や、教育効果を言語化したり可視化したりしていく作業です。しばしば「高度汎用力」と呼ばれる、課題発見、課題解決、社会実践に関わる力は、必ずしも単純な指標によって測れるものではないと考えています。しかしながら、さまざまな活動との接点を生み出し、本プロジェクトをより広く展開していくうえで、活動の意義を伝えることが重要な課題になると考えています。

2022年度にまとめあげた知見が、本プロジェクトの最終年度に、より実践的で実感をともなった成果となって現れることを期待しています。



序(堂目卓生)

第I部 共創の作法

- 第1章 やっかいな問題はどこから来て、どこへ行くのか(山崎吾郎)
- 第2章 問題を問い直す——共創の始め方(山崎吾郎・大谷洋介・戸谷用志)
- 第3章 成解を導く力を身につける——学びの往還(八木絵香・工藤充・水町衣里)
- 第4章 ネットワークをつむぐ——人と人をつなぐ人の作用(菅野拓)
- 第5章 社会イノベーションを教える——異文化協働体験とのかけあわせ(辻田俊哉)

第II部 共創の現場

- 第6章 +クリエイティブ——KIITOの実践(永田宏和)
- 第7章 教育×地元学——ともに学ぶ十津川村の中学生と大阪の大学生(上須道徳・立石亮伍)
- 第8章 アートが農村と出会うとき——アートプロジェクトの役割(松本文子)
- 第9章 小さな声——弱さが担うまちづくり(石塚裕子・今井貴代子)

むすび (山崎吾郎)

もっと学びたい人のためのブックガイド

〇コラム

- 1 やっかいな問題(山崎吾郎)
- 2 化粧品における特定成分フリーをめぐる問題(山脇竹生)
- 3 「対話ツール」のデザインコンセプト(岩田直樹)
- 4 新たな荒野で、新たな生態系をつくる(田村太郎)
- 5 社会イノベーション教育とその実践から得た学び(大木有)
- 6 自分の半径500mをより良くする(和田武大)
- 7 「とつユメ」の贈りもの(向平真司)
- 8 非線形の思考としての芸術(石川吉典)
- 9 地域に生きる「小さな声」の一人として(矢吹顕孝)